

## 第7章 総括

旧御津町西端の岩見地区から東に三つの山塊が延び、その中間（朝臣地区）に位置する山塊に朝臣4号・5号墳、朝臣7号墳が存在する。本報告書には、その三つの古墳の測定の報告と合わせて、過去の調査報告書・論文・現説資料等の紹介も併記した。それらの報告書等は一般市民の目に触れることが少ないと思われるため併記した次第である。又、過去の調査で未報告のものも記載すると共に、これからの調査対象になるとと思われる新規発見の古墳なども紹介した。

### 第1節 本報告書のまとめ

#### 1) 第1章

全国で一番遺跡の多い兵庫県だが、古墳も一番多い。特に揖保川下流域の御津地域は、弥生墳墓から前期古墳が目につく。さらに、以前は古墳の築造が東（市川・加古川水系）へ移動するために少ないとされていた中期古墳や、横穴式石室を持つ後期古墳・終末期古墳も連綿と築かれており、このような地域は、全国的に見ても稀であると共に古墳時代研究には欠かせない場所である。すなわち言い換えれば「古代ロマンの宝庫」が揖保川下流域の御津町にあり、弥生墳墓から古墳時代終末期にかけて450年間の歴史が存在しているのである。

それらを第1章図6（揖保川流域を中心とした墳墓・古墳編年）で表しており、興味深い編年図である。それは揖保川流域に次々に中期古墳がみつまっていることを反映している。さらに、失われつつある御津町の「小字」の紹介と、『風土記』にみえる古地名について『御津町史』にも出ていない内容を述べた。

平成の市町村合併前に調査したが、未報告であった朝臣地区の古墳の内容も本書にて披露している。加えて、この朝臣地区の古墳は古墳時代中期のものが大半を占めていることを報告した。

#### 2) 第2章

揖保川下流域、特に瀬戸内海に面した河口部の所謂「網干デルタ」の地形発達に関する論述は少ない。その意味で『御津町史』第一巻に収められた「図17 網干デルタの地形分類図」は筆者の想像力をかき立てた。一般的に浜堤列（砂堆列）は縄文時代の海進後に生じた海退期（約6千年前以降）に形成されたとされ、網干デルタ付近にも現在の揖保川河口から東へ約2kmの地点に東西に延びた明瞭な砂堆列が見られる。

第2章では数千年に及ぶこれらの砂堆の形成を時間軸にして古景観の復元を試みた。まずは、揖保川河口の流出方向の東から南への変化と砂堆形成の経過や流出方向変化に伴う揖保川河口域の砂堆形成と汀線変化を探った。河道変遷のきっかけを868年に貞観播磨地震などの巨大地震を生じさせた東方隆起を伴う9世紀頃の列島規模の地殻変動に求め、併せて前記地形分類図に記された旧河川痕跡を参考にすることで河道や汀線の変化を説明した。このことは先学の提唱した、所謂「揖保川の西遷」と矛盾しない。

さらに、後退する汀線や河道の変化を追い、古代の『播磨国風土記』に記載された内海景観、中世の「古網干遺跡」を取り囲む港湾や湿地景観に加えて、近世から近代の文献や絵図から網干地域の景観を復元し、同時に砂堆に依拠した「道」の成立にも言及している。

本章では、列島各地での海水準変動例を紹介し、古文書などから揖保川の変遷を読み取っている。尚且つ、揖保川河口近辺の砂碓形成と遺跡との比較を行い、それぞれの時代の古景観の解明に迫る論考である。決して考古学のみで解明できない貴重な報告である。

### 3) 第3章

過去の御津地域に関する記録20件の要点を紹介した。これらは合併前（揖保郡御津町）の記録であるが、『御津町史』に含まれていない貴重な内容が多い。又、弥生墳墓・古墳以外の成果も盛り込んだ。冒頭で述べたが、このような記録は一般市民の目に触れる機会が少なく、普段は仕事・子育て・勉強・奉仕・スポーツ・介護等々に追われる日々と察している。しかしながら地域の歴史、ひいては故郷を深く知ることにより、これからの世代の子供たちへと伝承するのも私たちの役目ではなかろうか…との思いである。

合併後、15年を経過したが、御津地域の考古学に関する報告は激減していることが読み取れる。合併による合理化の表れかと推測する。今後は、今一度先人の足跡と向き合って、遺跡・遺物を保存・活用することにより、御津をはじめ心豊かな町づくりに繋がればと願っている。

### 4) 第4章・第5章

一昨年（2018年）から計画をたて、昨年（2019年）には伐採作業を経て、本年（2020年）1月29日から3月21日の15日間に平板測量を行った。1969年から近年の間に表面採取した埴輪片・初期須恵器片・鉄器片の写真並びに図面を作成した。世界的に流行している新型コロナの影響もあったが、その間に各人集中し執筆したものである。

朝臣4号墳（約50mの円墳）・5号墳（約24m×28mの略方墳か。南側列石確認）は当初前方後円墳の可能性を考えていたが、測量をしつつ各人が観察した結果、立地条件・断面形態は条件を満たすものの、仕上がった平面図を見る限り、前方後円墳と断定するまでには至らなかった。但し、今後の確認においては試掘調査・発掘調査等の方法があるので、たつの市、或いは大学の研究室などによる後世の調査に委ねることとする。尚、朝臣7号墳は約24mの円墳で、古墳裾に列石が確認できる。

朝臣4号・5号墳、朝臣7号墳とも、その築造時期は古墳時代中期でも5世紀第2四半世紀と位置付けた。尚、時期想定との物差しとなる遺物（須恵器片・埴輪片）は注目すべき特徴が多く、詳細は本文（観察表含む）と図面・写真を比較しながらじっくりと見て頂ければと思う。

### 5) 第6章

須恵器・埴輪・古墳築造に加えて、過去の調査報告事例・近隣各遺跡の分布調査・発掘調査など踏まえた考察である。本報告は古墳の平板測量と表採遺物から見た報告だが、発掘は行わなくとも、夫々が知恵を出し合うと、ここまで知り得るのだと言うことを示した。尚、考察に関して意見・モレなどあればご一報下さることを期待している。

## 第2節 旧御津村の4地区の特徴

ここでは、改めて旧御津村の岩見・綾部山・朝臣・権現山4地区の弥生墳墓・古墳の特徴について概観する。

### 1) 岩見地区（岩見字北山）

岩見港から岩見坂（標高66m）の南側に7基の積石塚が存在し、「岩見北山積石塚墳墓群」（巻頭図版3参照）と呼ばれている。他に時期が異なる「岩見北山古墳群」があって、後期の横穴式石室墳が15基確認されている。特筆すべき7基の積石塚墳墓群では、岩見北山積石塚1号墓（弥生時代末）の竪穴式石槨から内行花文鏡が出土したり、全長23mの前方後方形をした岩見北山積石塚4号墓（弥生時代末）からは讃岐系とみられる二重口縁壺の口縁部片が採取されたりしている。

岩見坂を北へ超えると、揖保川町（旧河内村・旧神戸村・旧半田村）に入り、途中右手に5基から成る古墳時代後期の横穴式石室古墳群である「馬場前山古墳群」（1号墳と4号墳はたつの市指定史跡）が存在し、揖保川町河内の平野部（田園）へと広がる。左の山裾尾根に位置する「金剛山古墳群」（6号墳はたつの市指定史跡）・「黍田古墳群」（12号墳はたつの市指定史跡）を經由し、兵庫県指定史跡である養久山1号墳（巻頭図版3参照）を含み、多くの弥生墳墓群と横穴式石室墳で構成された「養久山古墳群」（43基）へと続いている。

岩見北山積石塚墳墓群は弥生時代末から古墳時代初頭であり、このように、古い積石塚は「阿讃播連合」（第3章第1節17）参照）と称される四国の徳島県（阿波）・香川県（讃岐）との交流が考えられており、岩見港を介へした海上交通が想定される。尚、岩見港は古代における「伊津・伊都」に相当する（第1章第5節参照）。

ところで、兵庫県内には赤穂市・相生市・姫路市（家島諸島）・小野市にも積石塚が存在していて、いずれも古墳時代後期とされている。ところが、古墳が確認されていない室津地区（たつの市御津町室津。岩見地区の西に位置する旧室津村）にも、大浦湾を見下ろす尾根に分布調査報告書に漏れている古墳時代後期と思われる積石塚1基が存在する。

### 2) 綾部山地区（黒崎字上綾部・東武山・基山・東綾部・萬燈・綾部山）

播磨灘の海岸に接した山塊では、黒崎自治会が綾部山梅林を営み、国立公園に指定されている海岸は遠浅で潮干狩りや海水浴などで賑わう観光地であり、各種別荘・保養所などがある。綾部山梅林一帯に広がる古墳群（弥生墳墓含む）を「綾部山古墳群」（巻頭図版3参照）と呼んでおり、綾部山39号墓近辺から見ると、浜辺や淡路島・家島諸島・四国・西の海岸線などは絶好のカメラスポットである。

この地区東部には、旧御津村における唯一の兵庫県指定史跡である古墳時代前期中葉（4世紀中葉）の輿塚古墳が存在する。また、地区西部には、2003年に道路拡張に伴う工事で発見・発掘調査されて全国的に有名になった弥生時代終末期（3世紀前葉）の綾部山39号墓がある。このほか、古墳時代中期の多くの古墳と後期の横穴式石室古墳など46基の古墳が登録されているが、7基はすでに消滅している。尚、綾部山30号・31号墳は39号墓と同時期（弥生時代終末期）の可能性を秘めている。

前期中葉の輿塚古墳を皮切りに、続いて築造された中期古墳のほとんどが埴輪を樹立している。

その他多くの後期の横穴式石室古墳の存在があげられる。

近年特に注目したいのは、この地区の尾根の東端に位置する武山城推定地において、拳大の円礫を大量に葺いた前方後円墳（仮称：武山古墳）が発見され、その地形を活用し後世に城としていたことが判明したことである。尚且つ、現地で採取した埴輪片が、川西編年Ⅱ期（4世紀中葉）との判定であり、興塚古墳と前後する可能性が高い。全長は80m強ある古墳であり、今後の調査を期待している。尚、この古墳の立地は、現在の富島川一帯に広がっていた内海（現在は陸地）に入り込む際にあり、岩見北山積石塚墳墓群と岩見港との関係とは少し異なるが、やはり海や港を意識した古墳である。

当時の港（津）は大きく二種類あったと考える。一つは、外洋から構造船・準構造船などが往来する港で、直接瀬戸内海に面する岩見港はこれに当たる。二つ目は、汽水域から支流を含む河川を遡るため、底が平らで喫水の低い高瀬舟のような船が停泊する船着き場（船溜まり）で、現在の富島川一帯はこのようなものであったと想定している。

### 3) 朝臣地区（中島字上山王、朝臣字妙泰・オノ木・上ノ山・山田ノ上・魔ノ原、碓岩字前山ほか）

東の小山には、古墳時代前期末か中期と思われる竪穴式石室がむき出しになった山王山古墳と、二つの横穴式石室を持つ後期前半の前方後円墳（全長48m）小丸山古墳がある。小丸山古墳からは装飾付須恵器（第3章図5参照）や埴輪片が出土している。その西側の朝臣山に「朝臣山古墳群」（巻頭図版4参照）がある。ここには中期前葉とされる埴輪を持つ前方後方墳の朝臣3号墳や、阿蘇溶結凝灰岩製の環状把手付舟形石棺蓋（たつの市指定文化財）が出土した朝臣1号墳（消滅）があった。今回平板実測し、埴輪を含む遺物を採取した朝臣4号墳・5号墳・7号墳は、5世紀第2四半世紀の古墳とみられる。又、みはらしの森事務所近辺には5世紀後半で直葬と思われる小型低方墳が多く眠っている。尚、みはらしの森登り口で平成7年（1995年）の分布調査時に装飾付須恵器の子持壺片を採取しており、小丸山古墳と同時期の古墳が存在していたことが想像される。

戦時中から戦後の昭和40年代までは山腹（巻頭図版2参照）での畑開墾並びに、風呂の薪材の採集が行われており、特に盛土の少ない小型低方墳などは削平されたものもあるだろう。したがって分布調査での判断には限界がある。山あり谷ありの地形で自然災害により古墳が壊れたり、新規発見に繋がるケースもあるが、破壊の最たるものは人の手によるものである。

### 4) 権現山地区（中島字梶治山、碓岩字馬道・菰田荒谷・北山、揖保川町市場字権現山・梶山ほか）

権現山には「権現山古墳群（133基）」（巻頭図版3参照）があり、その周辺には「碓岩北山古墳群（41基）」と「碓岩馬道古墳群（60基）」と「碓岩菰田荒谷古墳群（14基）」がある。ここでは4カ所の古墳群を権現山地区としてまとめるが、一部、旧揖保川町と旧龍野市にも広がっているので古墳の総数はさらに多くなる。

248基（旧御津町のカウント数）に及ぶ古墳が確認されており、しかも弥生墳墓から古墳時代の前期・中期・後期・終末期に渡る播磨を代表する古墳群である。弥生時代末から古墳時代初頭と思われるいくつかの墳墓・古墳の中には、古墳時代前期の特徴的な全長42.7mの前方後方墳である権現山51号墳と全長55mの前方後方墳である権現山50号墳、方形の積石塚である7号墳（26.7×30m）がある。特に51号墳は、平成元年（1989年）に近藤義郎氏が指揮する岡山大学を中心とした発掘

調査で、5面の三角縁神獸鏡と吉備と関わる特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が共伴することが明らかになった全国唯一の古墳として知られている。中期古墳はわずかであるが、碓岩馬道4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号墳（径8～13m程）は古墳時代中期後半の小型低方墳と考えられる。もっとも大半は後期から終末期古墳であるが、権現山尾根にある後期古墳には、両袖の横穴式石室が多い。又、碓岩に多い終末期古墳は等間隔で計画的に築造されている。

### 第3節 あとがき

この度の測量調査より前の2003年（平成19年）5月に、古くから御津町の遺跡や古墳に関わってきた、中溝康則・田路 守・萬代和明の3名にて4号墳南半分から5号墳（前方後円墳ならくびれ部）にかけて光波測距儀による墳形確認目的の測量を試みた。しかしながら、実測図を完成させることができず、公表するまでには至らなかった。自身の思いが捨てきれず、3年前ほどから準備を進めていたところ、地元「みはらし会」との出会いがあり、伐採作業を行い測量調査となったのである。多くの方々の協力を賜り報告書発行に至ったことは、感謝の気持ちで一杯である。全ての関係者に心よりお礼申し上げたい。

第2節では御津の4地区の古墳群につき述べたが、当時の海水面を想定するとすべての古墳群と集落は、海を介した他地域との交流が感じられる。ヤマトは言うまでもなく、阿波（積石塚）・讃岐（積石塚・庄内期の下川津式土器）・吉備（特殊器台形埴輪）・肥後（朝臣1号墳の石棺）などが掲げられる。御津の4地区の古墳群ではないが、龍子三ツ塚1号墳（掛保川町）や丁瓢塚古墳（姫路市）からは、山陰形特殊器台形埴輪や竹管文を多用した壺形土器などが出土しているので、山陰地方との関わりが考えられる。

当地には、弥生時代終末期・古墳時代前期・古墳時代中期・古墳時代後期・古墳時代終末期と連綿と築かれた墳墓・古墳、その数百基を超えるものが4地区に残っている。従って序文で記載したように一括で「古墳の町」のシンボルとして、まずは、たつの市の文化財指定を希望するところである。そのためには市民から盛り上げ、たつの市などの行政と一体となって進める必要があると強く思っている。その行為が町づくりに繋がることを確信していると共に、人生半ばを既に過ぎ去ったが、今後も諦めずに文化財指定に向け邁進する覚悟でいる。

ところで、私たちが現在生活をしているのは、先人たちのおかげであろうと常日頃思っている。私事であるが、60年前にガンで亡くなった母親・21年前に亡くなった父親・6年前に亡くなった兄、そして朝臣山古墳群などに眠る全ての先人（先祖）に感謝を込め本件を報告する。

最後に、母校龍野実業高等学校時代の生徒会考古学部の顧問“加藤史郎先生”（英語教師にして考古学者）が2018年12月9日にお亡くなりになった。その先生が生前に『自分史 海と考古学』を書き残され、その中の第6章「心残りなもの」に、このようなことを書かれている。それは、「採取したりした遺物は、すべて公共のものだという原則を順守すべき」と。恩師の教えを全うすべき、本報告書と合わせ表面採取した遺物は、私の本籍地である、たつの市へ寄贈することとする。

### コラム3 西播磨（御津地区）「地域首長」とヤマト「畿内首長」

2世紀後半から5世紀末（弥生時代終末期から古墳時代）の変化を述べる。

卑弥呼が活躍した時代（190年～248年）の御津地区では、岩見北山積石塚1号墓（前方後方形）から内行花文鏡、綾部山39号墓からは画文帯神獸鏡が出土しているが、この時期はヤマトとの関係はまだ薄く、朝鮮半島との独自のルートにて入手したと考えられる。3世紀後半に入り権現山51号墳で5面の三角縁神獸鏡が出土しているが、この頃からヤマトとの関係が見える。但し、51号墳は前方後方墳で古くからの墳形を維持し、ヤマトの影響を持ちつつ、伝統を継承していると想定する。4世紀中葉の輿塚古墳・武山古墳は前方後円墳であり、海を介したヤマトとの首長連合がみてとれる。尚、4世紀中葉から畿内は前方後円墳時代に突入し5世紀に入る。

一方、地方においては前方後円墳の築造が停滞する場所が多いのも事実であり、墓制の在り方は在地的な伝統を継承している。

しかしながら、規模は大きくはないが中形（50m前後）の帆立貝形古墳や円墳・方墳（一部、造出を持つ）は築造され、地方首長の存在は続いているのである。

このような事を表した和田晴吾氏作成の、中期古墳（5世紀代）の階層構成図を用いて論じたい。

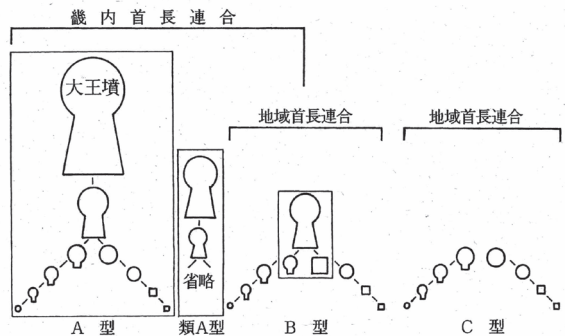


図1 中期古墳の階層構成の諸類型（注1）

図1の大王墓が存在する畿内首長（百舌鳥・古市古墳群）をA型とし、準じた畿内首長連合（馬見・佐紀古墳群）を類A型、畿内首長連合と関りのある地域首長連合（東播磨の玉丘古墳と玉丘古墳群・行者塚古墳と西条古墳群）などをB型、畿内首長連合との関係が希薄な地域首長連合をC型と位置付けてられている。これらを西播磨（御津地域）に照らし合わせると、邪馬台国時代以前は、各地では独特の墳墓が造られていて、古墳時代早期までは独自の地方首長連合で、古墳時代前期（3世紀後半）から一時B型となり、5世紀代より地域首長連合のC型になったと解釈した。即ちB型⇒C型と言えるのである。

尚、3世紀初頭の邪馬台国が畿内ヤマトとすると、各地の首長連合（吉備・出雲・近江・北九州など100余国の代表）が協力（出土遺物等から想定）し作り上げたと考える。勿論、播磨も何らかの影響は与えていたはずである。又、4世紀以降になると、実力をつけてきた畿内首長連合の長のヤマト（河内含む）が、「安曇氏族」（記紀に登場）（注2）をはじめとする海上・河川交通にたけていた「海人族」を傘下に、各地の地域首長に影響を与えたのではと考える。但し、地域首長以下の墓制は在地的な伝統を継承していく。

（文責：萬代）

（注1）図1は、和田清吾 2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館より

（注2）金井 恂 2013『安曇族の謎に迫る』安曇誕生の系譜を語る会

## 最後に

この度の報告書は、朝臣4号・5号墳と7号墳の平板測量を中心とし、一般に目に触れることが少ない過去の報告書なども纏めて紹介しました。みはらし会の発足前は、元地権者の株式会社東芝より朝臣山を旧揖保郡御津町に寄贈される予定があり、その場所に建屋の耐震が問題となっている庁舎の新設計画が持ち上がったとの事です。

該当の場所は、平成6年（1994年）度から平成8年（1996年）度にかけて分布調査がなされ、朝臣1号墳から朝臣9号墳並びに籬山城推定地と既に埋蔵文化財として登録されていました。その後、詳細調査の為、平成12年（2000年）度に国庫補助金による予備調査、平成15年（2003年）度に試掘を含む確認調査が行われ、合計24基の古墳が判明しました。その結果、庁舎建設は断念し、地域

市民の憩いの場として“みはらしの森公園”とすることになりました。その為に整備管理のために官民によるみはらし会が発足したという経緯があります。

ところで、左に掲げた名言は、考古学界の巨匠・森浩一先生が残された言葉であります。

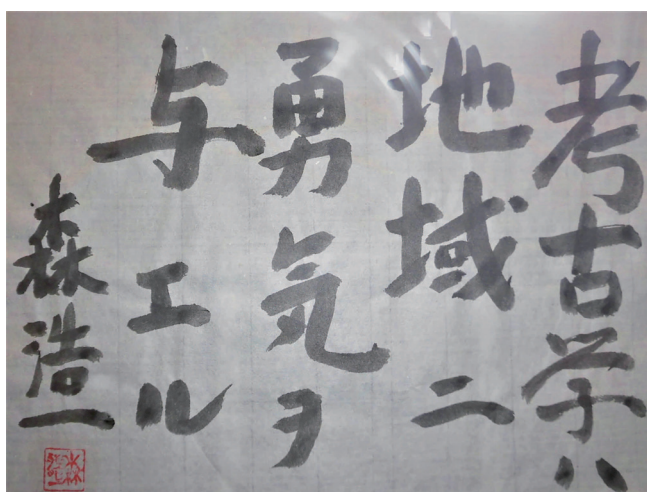


図1 森浩一先生直筆の写真（同志社大学蔵）

前章にも述べていますが、合併前から御津町は“ロマンあふれる御津”と呼ばれており、本報告書にあるように多くの足跡を先人たちが残してくださっています。

足跡すなわち埋蔵文化財は、私達が守り・後世に残し・伝承する責務があるのは勿論ですが、今後みはらし会として、地元の人々と共にみはらしの森の整備管理・文化財案内看板設置・遺跡散策パンフレット作製・散策会や勉強会などの企画を行う計画であります。

世界の総人口は77億人を超えて増え続けています。しかしながら我が国においては平均寿命84.2歳と香港に次いでの高寿命国となっていますが、その反面、出生率が1.43人と減少しています。総人口は減少をたどり、全国的に過疎化が進む日本列島ですが、当地も同様であります。そのような中ではありますが、各地にある文化財・民俗などを伝承することが近隣住民の結束を生み、そのことが地域の町おこしのきっかけとなります。さらに整備された自然環境は、災害時の避難場所などに繋がるのではと考えています。しかしながら、みはらし会メンバーも高齢化が進んでいるのも事実であり、徐々によいので新規加入を望む所であります。

尚、報告書の発行に当たり、費用の一部は、たつの市の“自立のまちづくり事業支援補助金”を活用しました。また、兵庫県では、毎年10月最終日曜日（今年は10月25日）を「ひょうご森の日」として定めており、みはらし会として、記念すべきこの日を発行日と致しました。

最後に、多くの方々からの協力を賜り感謝申し上げますと共に、文化財と共に自然あふれるみはらしの森を活用下さることを願っています。

2020年10月25日

みはらし会 会長 塚本敏昭

写真集 (1) 朝臣山古墳群



登り口



整備された公園



みはらし会事務所・展望台登り口



みはらし会事務所



展望台から南 (瀬戸内海) を望む



展望台



写真集 (2) 朝臣山古墳群



みはらしの森入口より小丸山古墳・山王山古墳がある東を望む



みはらしの森展望台から朝臣山古墳群がある西を望む



みはらしの森展望台より東北の山々を望む



朝臣山から北側の権現山を望む



前方部から見た朝臣3号墳



朝臣1号墳に設置された水槽

### 写真集 (3) 朝臣山古墳群



朝臣7号墳近辺から見た武山・基山



朝臣7号墳近辺から見た綾部山と家島諸島



奥が朝臣4号墳・手前が朝臣5号墳

写真集 (4) 朝臣山古墳群



南から見た朝臣4号墳



朝臣5号墳・奥は朝臣4号墳



南から見た朝臣7号墳



朝臣7号墳の南側列石



朝臣11号墳

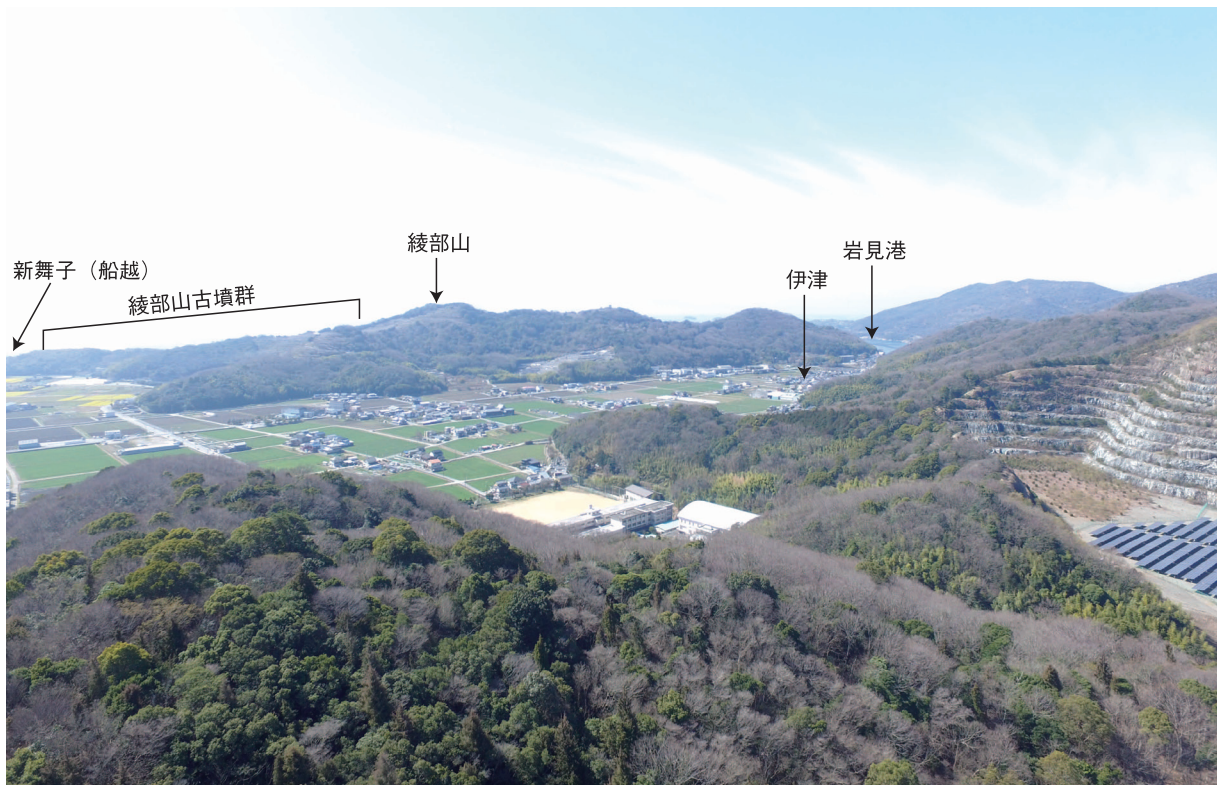


横穴式石室が半壊状態の朝臣8号墳

写真集 (5) 朝臣4号・5号墳上空から見た展望 1



東方面を望む



南方面を望む

写真集 (6) 朝臣4号・5号墳上空から見た展望 2



西方面を望む



北方面を望む

## 報告書抄録

ふりがな	あさとみ4ごう・5ごう・7ごうふんそくりょうほうこくしょ							
書名	朝臣4号・5号・7号墳測量報告書							
副書名	旧御津村の先人の足跡を再検証する							
発行者	みはらし会 考古部会							
所在地	兵庫県たつの市御津町朝臣							
編著者名	編集・執筆：萬代 和明（正）・石黒 始（副）・白谷 朋世（副） 執筆：塚本 敏昭・原田 一博・田路 守							
発行年月日	2020年10月25日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	測量範囲	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
朝臣4号墳	ひょうごけんたつの 兵庫県たつの 市御津町碓岩 あざまえやま 字前山	28463	470179	34° 47' 26・08"	134° 33' 08・ 01"	2020年1月 29日から3 月15日	6,000 m <sup>2</sup>	平板測量 による古 墳形状の 確認
朝臣5号墳			470180					
朝臣7号墳	ひょうごけんたつの 兵庫県たつの 市御津町朝臣 あざあんのほら 字魔ノ原	470182	34° 47' 17・47"	134° 33' 06・ 16"	1,600 m <sup>2</sup>			
要約	<p>朝臣4号墳と5号墳が前方後円墳の可能性を有するのかどうかを実証するために、平板測量を行った。結果は、別個の古墳と報告することになった。4号墳は経50mの円墳、5号墳は24m×28mの略方墳である。又、近接する7号墳は経24mの円墳で、各所に列石が見てとれる。多くの遺物を表面採取した結果、須恵器や埴輪から3基とも5世紀第2四半世紀に位置付けられることが判明した。特に4号墳は大形の円墳であり、当地の首長墓系譜を継承すると言えよう。</p> <p>あわせて、旧御津村に関する過去の報告書並びに論考と、古景観などを紹介した。又、未報告であった朝臣山古墳群の概要や、新発見の古墳も紹介した。</p>							

兵庫県たつの市御津町

## 朝臣4号・5号・7号墳測量報告書

— 旧御津村の先人の足跡を再検証する —

令和2年（2020年）10月25日 印刷発行

発行者 みはらし会 考古部会 （みはらし会 会長 塚本 敏昭）  
〒671-1342 兵庫県たつの市御津町朝臣212-2  
TEL (079) 322-3272

編集者 みはらし会 考古部会 萬代 和明（ひょうご考古楽倶楽部員）  
〒675-0111 兵庫県加古川市平岡町二俣758-8  
E-mail:kazuaki02mandai@yahoo.co.jp  
TEL (079) 437-7156

印刷所 有限会社 乗鞍印刷  
〒671-1331 兵庫県たつの市御津町岩見1052  
TEL (079) 322-1872



上空から見た朝臣4号墳（上）と5号墳（下）（上が北）